日本道徳教育方法学会会員の皆さんのシンポジウム参加を呼びかけます。またどうぞ国際委員会にご参加ください。連絡は、上薗のメールまでお願いします。

日本の進路を考える

平和責任 ～被害、加害責任、そして記憶の文化～

日時：**2013 年 8 月 4 日**（日）シンポジウム

シンポジスト：**岡 裕人**（フランクフルト日本人国際学校事務局長）

『忘却に抵抗するドイツ　歴史教育から「記憶の文化」へ』(2012)、大月書店

福岡賢正（毎日新聞社西部本社報道部副部長）

『小さき者たちの戦争』(2010)、南方新社

司会：**上薗 恒太郎**

（長崎大学教育学部教授・日本道徳教育方法学会国際委員会委員長・長崎大学生活協同組合理事長）

2013 年 8 月 3 日（土）は、岡裕人、福岡賢正の 2 つの著書の読書会
2013 年 8 月 5 日（月）は、岡裕人を含む対話の集まり
（3 日間を長崎大学教育学部「平和学」の集中講義としておこなう）
参加無料

場所：**長崎大学教育学部 SCS 教室**（教育学部の裏門側、長崎大学生活協同組合食堂近く。2 階）

できるだけ公共交通機関でおいでください。シンポジウムは Skype で会場外にも発信します。

時間：開場 12 時 30 分

13 時 10 分から
シンポジウム

13 時 30 分から

16 時 30 分

シンポジウム趣意文

上 薗　恒 太 郎

3 つの線の交点上に、3 日間がおこなわれます。

（ドイツからの問いかけ）

1 つは、日本道徳教育方法学会国際委員会会員による国際読書会を、岡裕人『忘却に抵抗するドイツ歴史教育から「記憶の文化」へ』(2012)、大月書店によって、著者参加を得て、ドイツ、中国、日本を結んでスカイプで 4 ヶ月間にわたって行いました。これが成功裏に終了し、上薗恒太郎のドイツ訪問、岡裕人の長崎訪問へと話が発展しました。

上薗は、2013 年 3 月にドイツを訪問し、チュービンゲンの平和研究所、およびブラウンシュバイクのゲオルク･エッカート教科書研究所を訪問しました。平和研究所では、チュービンゲン大学で行われる平和セミナーの様子を知るとともに、平和学講義のカリキュラムが未開発であることについて話し合いました。そして平和学のカリキュラム開発が、長崎での平和学にとって責務となると知りました。

岡裕人と訪れたゲオルク･エッカート教科書研究所は、世界の教科書を集めると共に、ポーランドならびにフランスとの歴史認識のすりあわせを行い、共通の歴史教科書を作成しています。この作業は終了しており、フランスとの 3 冊目が 2011 年 9 月に発行され、ポーランドとのものは発行予定です。被害･加害を超える歴史認識のすりあわせが、EU を生む基盤をつくったと言えるでしょう。被害・加害の記憶をすりあわせるこうした努力は、日本がアジアにおける道を探るために必要でしょう。

このほか上薗は、ドイツ戦後史を展示するボンの国立歴史博物館を訪れ、ドイツの自己認識について友人と話し合い、フランクフルト a.M.でユダヤ博物館ならびにゲットーの跡地と墓地を訪れ、戦禍をくぐり抜けた美しいシナゴーグをユダヤの歴史を学ぶ成人大学（Volkshochschule）の人々とともに訪れ、ユダヤ教の側にもナチスに迎合する動きがあったなどの解説に耳を傾けました。また、フランクフルト a.M.の歴史博物館で戦争犯罪を告発する展示が行われており、そこに日本軍の慰安婦であった女性たちの顔写真がずらりと並べられていたのは、衝撃でした。それはヨーロッパが日本をどのように見ているかの展示であるように思えました。

（中国からの問いかけ）

2 つ目は、島の領有権問題で延期された日本道徳教育方法学会国際委員会の中華人民共和国遼寧省訪問を、人民対外友好協会国際交流部と話して 2013 年 3 月に復活実現したところに始まります。遼寧省は、日本軍が柳条湖事件を起こして 15 年間にわたる戦争を始めた地であり、731 舞台の暗躍した地であり、中華人民共和国が中国最初の航空母艦を「遼寧」と名付けた地であり、日本の加害責任を自覚せざるを得ない地です。この地を、道徳の名称を掲げて訪問するにあたり、岡まさはる記念長崎平和資料館ならびに福岡賢正に基礎となる日本の事実について協力を求めました。岡まさはる記念長崎平和資料館は、日本 26 聖人記念館の奥にあって、中国や朝鮮半島における日本の加害行為を展示しており、福岡賢正は『小さき者たちの戦争』で日本の市民の加害行為について聞き取りを行っています。

この訪問においては、最初に瀋陽の九・一八歴史博物館を訪問したいと希望して、伺いました。中華人民共和国の歴史認識と教育の場を改めて知っておきたいと思ったからです。公立の渾南新区第二小学校で道徳の評価に話が及んだとき、日本では、子どもの道徳性は評価できない、知識ならば評価できるが、との論議になると話したのに対して、先生方はほほ笑みながら、そうです、試験するのは知識です、と言われました。愛国心教育に話が及んだとき、中国の先生方としては、郷土の地理、歴史と共に教える方が、愛国心を育てやすいといわれました。調べてみると実際、地理認識が「品徳と社会」の教科書に入っており、世界の中で中国がどこか、自分たちが住んでいる場所はどこかの説明が、小学校 3 年生

下の品徳の教科書に入っています。道徳は、中華人民共和国では「品徳」の名前で、地理、歴史、政治と結びつけて教えられます。これに対して、上薗は、次のように日本の立場を説明しました。日本では米軍の日本占領後 GHQ が最初に停止したのが、修身、日本歴史、地理で、これらの教科書は集めて焼かれました。その後、日本の道徳は、地理、歴史、政治、宗教と絡めない形で行われています、と。一言でいうと、日本の道徳教育は控えめだといえます、教科書ではなく民間の出版社による資料が使われ教員の自作資料が許され、道徳専任の教員がおらず基本的に担任の教員が授業を行い、道徳授業による子どもの道徳性評価は行っていません、これは戦争時の修身についての反省でもあります、と説明しました。

遼寧省を離れるに際して、人民対外友好協会国際交流部長といわばさしで話しました。部長からの、日本が戦争中の行為を反省しているようには見えないとの突っ込みに対して、上薗は、村山談話（敗戦から 50 年の節目に出された総理大臣談話）で反省の意を表し、お詫びの気持ちを表している、と答えました。しかし部長は、その後の政治家や各方面の発言を聞いていると、真摯に反省しているとは思えないと言われました。九・一八歴史博物館の話や、ドイツの戦後の努力など、突っ込んで話しましたが、ぴりぴりした雰囲気ではなく、互いに確認しておきたいと、友好的に話すことができました。そして最終的には、民間交流でいきましょうと合意しました。政府関係がどのようになろうとも、民間交流の厚みをつくっておくことが、日中の未来のためになるとの基本認識で合意しました。

（学生と市民が担い手）

3 つには、長崎大学教育学部の授業「平和学」を上薗恒太郎が引き受けるにあたり、受講者だけではなく、広く平和責任を考える場を、日本道徳教育方法学会国際委員会の行事として、また平和問題に関心のある長崎大学生活協同組合組織部の学生を含めて構想しました。平和学の構築は、戦争を知らない世代の平和への責任の果し方として、長崎大学生に止まらない課題です。そこで、他大学とも連携して学生の対話をつくろうとしています。

この課題は、市民にとっての課題でもあります。そこで、市民の参加を求め、被爆地長崎の市民団体でつくるピースウィーク実行委員会のイベントの一環として 8 月 4 日の「日本の進路を考える：　平和責任　～被害、加害責任、そして記憶の文化～」のシンポジウムを行います。その前後、3 日は岡裕人と福岡賢正の本の読書会、5 日は、学生を中心とした対話、そこに市民、岡裕人、上薗恒太郎が加わる形をとりたいと考えています。

平和学のカリキュラムは、長崎を舞台にすると、被害を知り、加害を自覚し、平和責任を考える構造になるでしょう。それが三菱兵器工大橋場跡に立地する長崎大学での討論にとって自然な思考展開です。しかし、被害、加害、平和責任の構造は、どの地においても普遍的に使える構造です。長崎のカリキュラム構造が、世界の平和学になる可能性を秘めています。

シンポジウムは、若い世代が平和責任を果たすべきだとの地点で終了するのではなく、そのためには記憶の文化を創り出す必要があるとの認識まで深めたいと考えます。体験そのものを継承することは難しく、また歴史認識のすりあわせだけでなく、未来につながる関係を構築しようとすると、どのような記憶として創造するかの対話が、アジアにおける日本の進路を考えるために重要です。記憶を編み直す対話は、戦争体験のない世代が前に進むために必要でしょう。海外との文化交流の記憶の集積された町、長崎は、その舞台としてふさわしいでしょう。

2013 年の授業「平和学」ならびにシンポジウム「日本の進路を考える：　平和責任　～被害、加害責任、そして記憶の文化～」において、長崎に集う学生、長崎の市民、日本道徳教育方法学会会員、ピースウィークに集う皆さん、そして関心を寄せる多くの人々と対話を深めたいと思います。

皆さまのご参加をお願いいたします。

戦争を自分のこととして考えるために

福岡　賢正

新聞記者になって３０年。特に戦争や平和の問題にこだわって取材を続けてきた人間ではありません。これまでに共著を除いて７冊の本を出版していますが、その中で戦争や平和に関わる本は２冊だけです。

その２冊は０７年４月から３年間、毎日新聞の朝刊で続けた「平和をたずねて」という連載に加筆してまとめたもので、私が話せることと言えば、それを書くに当たって取材し、考えたことしかありません。ということで、その取材に取りかかった２００７年の２月、当時の編集局長にあてて書いたメールがパソコンに残っていましたので、自己紹介を兼ねてそのまま転載します。

編集局長様

福岡です。正直なところ、最初は「平和なんて雲をつかむような話をどうやって具体的なイメージとして読者に届けられるのか」と戸惑うばかりで、モチベーションも持てないでいました。

前にもちょっと話しましたが、今年の元旦に帰省した際、そう言えばじいさんが戦死してたなあと思い出して、父に「じいさんのことは覚えとるな」と尋ねてみました。私の問いに、ビールを飲んで真っ赤な顔になった父は「そら当たり前たい。中学１年だったけんな」と言いながら、初めて祖父のことを話してくれました。父ももう 75 歳。昨年には脳こうそくで入院し、随分記憶もあやふやになっています。

私が物心ついてからそれまで、父は一度も祖父のことを話したことはありませんでした。恥ずかしいことですが、実は私は祖父の名前すら知らなかったのです。おそらく今回の企画がなかったなら、一度も会ったことのない祖父のことを私が尋ねることなどなかったはずです。父も死ぬまで自分から話すことはなかったでしょう。

父が話してくれた祖父の話は衝撃でした。天皇の玉音放送の後の満州でのソ連軍との交戦で行方不明となり、私が生まれる１年前にようやく戦死公報が届いたので葬式を出したというのですから。父が母と結婚したのは葬式を出したすぐ後で、間もなく私が母のおなかに宿ったことになります。父が祖父のことを一切話さなかった理由が、何となく分かるような気がしました。ずっと生きているかもしれないと思い続け、ようやくその死を受け入れて、踏ん切りをつけたわけですから。

自分にとって遠い遠い空のかなたにあると思っていた平和や戦争の問題が、一気に手の届く所まで下りてきたという感じがしたのはこの時でした。

現在の農業改良普及員である農業会の農業技丁の仕事をしていた祖父が召集されたのは昭和１９年の７月。両親と妻、そして６人の子供を残して 36 歳での出征だったそうです。階級はもちろん二等兵です。

令状が届いてから出征までのわずかの間に、祖父は自宅の裏にあった１００平方メートルほどの他人の竹やぶと、別の場所の自分の土地を等価交換し、やぶを切り開いた後、スコップで池を掘ったのだそうです。夏の炎天下、ひたすらに。そして出来上がった池に水を入れてコイの稚魚を放し、「太ったら食え」と子供たちに言い残して祖父は旅立ったそうです。すでに敗色は濃く、生きて帰れないと覚悟していたのでしょう。

「おやじは色の白かったけんね。そん背中の皮の２回むけらしたったい。ほかにはあんまり覚えとらんばってん、そるばっかりは、忘れん」と父は目に涙をためて言いました。

その話を聞いた夜、布団に入って目を閉じると、育ち盛りの子供たちが飢えないようにと真夏の照りつける日差しの下でひたすら池を掘る祖父の姿がまぶたに浮かんできて、泣けて泣けて仕方ありません

でした。

父によると、祖父は出征前、「日本男児が捕虜になるとか、恥ずかしゅうしてでくるもんかい」と言っていたそうです。だから親せきの間では、攻めてきたソ連軍の戦車に爆弾もろとも突っ込んで自爆さしたつやろうと話していたそうです。それでも祖母は生きていると信じ、待っても待っても帰ってこない祖父を、一縷の望みを捨てずに待ち続けたらしい。霊能力があってズバリ言い当てると称する人を、熊本ではまっぽし当たるという意味で「まっぽしさん」と呼びますが、「まっぽしさんの所に行って見てもろうて、生きとらすて言われて喜んだりしとらしたたい」と父は言っていました。

14 年間、待ちわびて、昭和 34 年の暮れに届いた空っぽの白木の箱と戦死公報。戦死の日付は昭和 20 年８月 20 日と記されていたそうです。

王道楽土、五族協和を掲げた満州国が、日本の中国侵略のための傀儡国家であったことは、今では誰でも知っています。その防衛のために戦った祖父は日本の侵略に加担したということになるのでしょう。中国の人たちにしてみれば、自分たちの国土や農地を奪い取った憎き日本鬼子（リーベンクイズ）のひとりだったに違いない。追いつめられていく非情な軍隊組織の中で、最も低い階級の初年兵で、しかも高齢だった祖父は、随分と辛い思いをしたでしょう。いじめられたものが、自分より弱い者をいじめてしまいがちないじめの連鎖の構図を思う時、祖父が現地の人たちにつらく当たった可能性もあります。そして、ポツダム宣言の受諾声明後なのに捕虜になるのが恥ずかしいと自ら進んで死んだのであれば、何とバカなことをしたのかと思ったりもします。でも、子供たちのために真夏の炎天下に背中を焦がしながら池を掘り続けた祖父の誠実もまた、疑い得ない確かな真実です。

若くして未亡人となり、舅、姑、小姑に６人の子供を抱えて苦労を重ねた祖母は、90 歳過ぎまで生きました。日本遺族会が催す靖国神社参拝と皇居の草取り奉仕ツアーに時々出かけるのが楽しみで、帰って来ると「天皇さん（昭和天皇）が手ば振ってやんなはった」と喜んでいました。おそらく祖母も、軍国日本を銃後で支えた典型的な良妻賢母であったのでしょう。

祖母は人の悪口を絶対に言わない人で、私たち孫にはただただ優しいおばあちゃんでした。彼女が亡くなる１年くらい前、入院中の彼女を父とともに私の娘を連れて見舞った時のことが今でも忘れられません。枯れ木のように細くなった手で、自分の財布から千円札を２枚取り出し、ティッシュペーパーにくるんで、ひ孫である私の娘に握らせてくれました。自分は病院のベッドで寝たきりで、もう目もあまり見えなくなっていたのに。その祖母の優しさも、疑い得ない確かな真実です。

思えば、戦争とは、そういう誠実さや優しさを持った無数の人々が、敵と味方に分かれて殺し合わされる不条理のことなのでしょう。そしておそらく、そうした誠実さや優しさを巧妙に絡め取るような形で、その不条理は世の中を覆っていくものなのでしょう。

私が人吉通信部で働いていたころ、熊本県の水上村に良心的兵役拒否者で自給的な農業を営みながらトルストイの翻訳を続ける絶対平和主義者の北御門二郎さんがいました。何かの集会の時、その北御門さんのお話を聞いた後、私は手を挙げて質問をぶつけたことがあります。「暴力はどんな時でもふるってはいけないということでしたが、暴漢が押し入って来て、今まさに自分の子供に襲いかかろうとしているその瞬間でも、暴力をふるってはいけないのでしょうか」と。それに対して北御門さんはきっぱりと「いけません」と言い切りました。「じゃあ、どうすればいいんですか。だまって子供が襲われるのを見ていろとでも言うんですか」と、私は食い下がりました。北御門さんは「いいえ、暴漢と子供の間に入って、必死に命ごいをするんです」と答えました。当時、長女がまだ保育園に通っていた私は「そんなこと私にはできません」と言って、北御門さんの主張をヒステリックに否定するような形で一方的に議論を打ち切りました。

北御門さんが言われたことはよく分かりました。ほんの少しでも暴力を正当化してしまえば、それが堤防に開いた蟻の一穴となって、平和の論理はあっという間に崩れ去り、巨大な暴力である戦争までは一息なのだ。そう言われれば、その通りだろうと。けれども北朝鮮のミサイル発射や核実験の実施に日

本人の多くが心穏やかでいられないように、暴漢に家族が襲われそうな状態に陥った時にも非暴力を貫くことはなかなか難しいし、それを万人に求めるのは多分不可能です。だからこそ家族思いの誠実さや優しさが容易に不条理を呼び寄せてしまうのでしょう。その証拠に、理不尽な敵をバッタバッタと倒していく映画やドラマやアニメのヒーローたちは、決まって誠実で優しいものです。

ならば、それを前提とした上で、人々の誠実さや優しさが不条理に絡め取られないようにする方法があるのか、そのためにはどうしたらいいのか。それを考えることが「平和をたずねる」ことではないか。それが今の時点での私の問題意識です。

まだどんな連載になるのか、きちんとしたイメージは出来ていませんが、きっとこれまでにない「平和企画」にできるような気がしていますので、ご支援よろしくお願いします。

以上がメールの内容です。シンポジウムでは、この問題意識に従って取材した事例を紹介しながら、私たち戦争を知らない世代が、戦争のことを自分の問題として捉え、戦争に向かおうとする流れに抗って、近隣の国々の人たちと共に平和な世の中を作っていくために必要なのは何かを皆さんとともに考えたいと思います。

記憶と平和について考える

岡　裕人

私は平和学の専門家ではありませんし、平和に関わる活動に関わってきたわけでもありません。また、特に戦中・戦後の歴史の専門家でもありません。

ただ、長年歴史学や歴史教育に携わり、昨年夏に出版した『忘却に抵抗するドイツ：歴史教育から「記憶の文化」へ』（大月書店）を書くに当たり、ドイツを中心としたヨーロッパでは先の大戦と結びついた「記憶」が熱いテーマになっていることに改めて気づかされました。しかも「記憶」に対する新たな取り組みが始まっていました。大戦だけでなく、統一ドイツが現在抱える重要な課題の多くが、「記憶」に関わっていることも見えてきました。

このように私がドイツで「記憶」について考えるようになったいきさつをもう少し詳しくお話しして、私の自己紹介に代えたいと思います。

私は大学時代にはヨーロッパ中世史を学びました。国王や諸侯ではなく、中世の一般民衆や社会の底辺や境界で生きる人びとの暮らしや生き方にスポットを当てる。恩師の「社会史」とよばれる新しい歴史学への取り組みに心惹かれました。特に中世の「自由」について興味を持ち、ドイツ中世後期に自由を求めて領主に反旗を翻した民衆蜂起を修士論文のテーマに選びました。その延長線上で「ドイツ農民戦争」という前近代ではヨーロッパ史上最大の民衆運動を博士論文のテーマに選び、現地ドイツでの本格的な原史料研究を志して 1989 年秋に当時の西ドイツ、コンスタンツ大学に留学しました。

その矢先に、「ベルリンの壁崩壊」という世界史的大事件が起こったのです。民主化を訴えて数十万人規模のデモを行った東独市民たちの中には、デモに出る前に必ず教会に集い、平和的な抗議運動を誓ってデモに出た者も多かったと聞きます。私は「ドイツ農民戦争」を念頭に、16 世紀初頭に宗教改革派説教師に導かれた民衆の姿を、20 世紀末に民主化を求めて抗議運動する東独市民に重ね合わせて見ていました。

すぐさま壁崩壊直後のベルリンにも行ってみました。東ベルリンの裏通りには、戦後そのままずっと放置してあったかのごとく、ガラクタが積み上げられた空き地がたくさんありました。そんな空き地の一つで遊んでいた小学生の女の子たちとおしゃべりしたとき、無邪気な彼女たちは「西側から来る人たちは恐ろしい・・・」と母親から戒められていることを話してくれました。これが当時について私が最も印象深く記憶するシーンです。

私のドイツ滞在は、ベルリンの壁崩壊とともに始まり、まさに統一ドイツの歩みとともにあったと言えるでしょう。

「ドイツ農民戦争」の研究で学位を取った後、縁あって在ドイツ全寮制日本人学校に就職し、20 年近く中高生に歴史や政治経済（公民）を教えてきました。その一方で、ドイツで生まれた私自身の子どもたちは、現地ドイツの学校教育を受けて育っていきました。私は歴史を学び、歴史を教える者として、日独両方の学校教育を見比べながら、ドイツではどんな歴史教育がなされてきたのか、将来に向けてどんな教育が目指されるのか、そんな関心を念頭に統一ドイツの歩みを見守ってきたのです。

こうして私が長年ドイツで歴史学および歴史教育に携わってきた証を一冊の本にする機会が与えられました。とりわけドイツの歴史教育をできるだけ生の姿で伝えようと、現地の学校や研究機関、講演会や朗読会に出かけて取材し、各地、各所で対話した多くの人たちの声を届けようと工夫しました。

テュービンゲン平和教育研究所の取材では、戦争の無い状態をさす狭義の「平和」だけではなく、も

っと平和に積極的な意義を見出そうとする試みを続けている話を聞きました。

ゲオルク・エッカート国際教科書研究所では、かつて加害者、被害者の関係にあったドイツとポーランドが共同教科書委員会を設立し、共通の歴史認識を作り上げるべく、互いに異なる過去の記憶を擦り合わせる地道な対話を長年にわたり忍耐強く続けてきたことを聞きました。同研究所でこの作業に直接関わった歴史研究者の言葉は、一言一言重みがありましたが、「一にも二にも忍耐が必要だ。忍耐強く対話を続ければ、やがて相互理解のスパイラルが生まれる」という希望も与えてくれました。

アウシュヴィッツからの移送途中に逃げ出し、ホロコースト（ユダヤ人大虐殺）を生き延びたユダヤ人女性の話。旧ドイツ帝国東部地域から追放され、迫害を逃れてドイツ西部に避難してきたドイツ人教員の話。冷戦時代、東ドイツではホロコーストも共産主義による東独建国神話に利用されてきたという、東ベルリン生まれのジャーナリストの話。兵役を良心的拒否して長崎の岡まさはる記念資料館で働き、長崎で日本とドイツの過去の記憶について考えたドイツ人青年の話。

取材を通じて「記憶」に取り組むことの重要性に改めて気づかされました。ベルリンの壁崩壊をきっかけに東西ドイツが再統一し、東欧革命が歴史認識を一変させたヨーロッパで、1990 年代以降、「記憶」がさらに熱いテーマとなったことがわかりました。特定の過去の出来事についてその国や国民、その社会や市民がどのように記憶し、どのように記憶を表現してきたのか。さまざまな媒体を使った記録や展示、記念碑、記念日や式典など、その記憶にまつわるあらゆるものの総合体を、「記憶の文化」という概念で表そうとする新しい思潮が起こったのです。記憶が文化を形成し、記憶やその記憶の文化が時代とともに変わっていく。このことを意識して捉え直す試みが始まったと言えるでしょう。

日本でも戦争や平和について語る時、二度と忘れてはならない事柄、永久に伝えていく事柄として、常に記憶が話題となります。しかし、「記憶がその時代、その国、その社会の文化を形成する」という理解、ヨーロッパで始まった「記憶の文化」というとらえかたは、まだ日本には馴染みが無いように思います。

ドイツでも時代の生き証人が年々減少する一方で若者は戦後第三、第四世代となり、彼らにとって戦争の記憶は遠い昔の一つの歴史になろうとしています。日本とよく似た状況です。さらに、現代ドイツには外国からの移民とその子孫が多く住み、彼ら無くしてドイツの社会は成り立たなくなっています。移民たちの多くは、ドイツが引き起こした過去の戦争とは元来無関係です。こうした状況下で過去の戦争や平和の責任についてどう考えていくのか。ここにこそ「記憶の文化」がカギを握るものと期待されます。

シンポジウムでは私が取材した「記憶」にまつわる話を交えながら、記憶と平和についてみなさんといっしょに考えてみたいと思います。「記憶」をキーワードにすえることで、話題に広がりが出てくるでしょう。ドイツを中心としたヨーロッパの事例が、日本や中国、韓国など東アジアの将来について考える際に、参考になることが多いと考えます。